

## ■平成 28 年度「白鷹町史談会文化財めぐり（研修旅行）」

本年度の「白鷹町史談会文化財めぐり（研修旅行）」が下記のように開催されました。本年度は「鶴岡市・酒田市近郊の文化財めぐり」ということで行いました。市街地から少し離れた地域で、名前は聞いたことがあるが行ったことがないという所をピックアップしました。

### 鶴岡市・酒田市近郊の文化財めぐり

- 1 期日 平成 28 年 11 月 10 日(木)  
午前 8 時出発 (7 時 50 分集合)



### 2 見学場所

#### ①黒川能の里「王祇会館」

重要無形民俗文化財「黒川能」を広く紹介する展示機能と、イベントや研修など地域住民の交流や生涯学習の機能を併せ持つ施設です。

展示機能では、毎年 2 月 1 日から 2 日夕方まで夜を徹して行われる王祇祭の稚児舞「大地踏」を実物大の人形で再現しているほか、視聴覚室では「王祇祭」「黒川能の 1 年」「水焰の能と蠟燭能」「豆腐祭 一昭和 41 年一」の 4 本の番組を大型スクリーンで見ることができます。(HP より)

#### ②松ヶ岡開墾場

松ヶ岡開墾場は、明治維新後、庄内藩士

たちが拓いた緑豊かな大地として、国指定史跡として指定を受けております。その中に瓦葺上州島村式三階建の蚕室が五棟現存し、一棟が修復されて松ヶ岡開墾記念館となっています。記念館周辺には、食事処や庄内の米造り用具収蔵庫、庄内映画村資料館などもあります。

#### ◎松ヶ岡開墾記念館

- 1 階／開墾、農業、蚕糸関係資料を展示。  
2 階／開墾士の末裔であった田中兄弟が収集した全国の土人形、土鈴など郷土玩具コレクション約 25,000 点を展示。(HP より)



#### ③松山歴史公園

昭和 57 年 5 月に開園し、松山藩としての歴史を持つ松山地区の歴史と文化を継承し、創造する交流拠点で、山形県指定文化財「松山城大手門」をはじめ、茶室「翠松庵」や郷土文化保存伝承施設「松山文化伝承館」などがあります。

このほかにも、勤王の志士川俣茂七郎の顕彰碑のほか、篤志家齋藤元経「愛山頌徳碑」、そして幕末・明治と松山の礎を築いた松森胤保の胸像もあります。また、園内では、4 月下旬に桜、5 月上旬にはツツジ、そして 6 月下旬にはスイレンが咲き、季節の花も見どころの一つです。(HP より)



## ■湯殿山への道のり（その5）

### 伊藤 隆

掲載する写真は私（伊藤）が撮ったもののほか、丸川桂一郎さん、布施範行さん、志田菊宏さん、高梨みささん、江口儀雄さん、木村さんから提供していただいております。

#### 6. 参拝成功の要因

- ①参拝のために調査したいということを出して人に言ったこと。このことが同じ思いを持った丸川さんに伝わった。1人では限界があったろう。丸川さんの知識と経験や実行力に、私のいささかの山の経験が加わりルート確認に役に立った。
- ②たまたま昭和54年の参拝の発表会が「あゆむ」であったこと。当時の資料が参考になった。
- ③調査に協力してくれた方がいたこと。調査が効率的になった。
- ④藪になっていた箇所刈払を声かけしたところ、協力してくれた方がいたこと。協力者がいなかったらもっと時間がかかったらう。
- ⑤出発日が決まったら、周囲に「湯殿山に歩いて行くのだ」と言ったこと。行かないと格好がつかないように退路を絶った。
- ⑥白鷹町外からも参加していただいた方がいたこと。特に西川町内の弓張平、六十里越街道の案内をしていただき、充実した参拝ができたこと。終盤も先導していただき、無事に到着できた。
- ⑦お宿の江戸屋さんで地元の方に歓待していただいたこと。料理が多く美味しく、ゆっくり休むことができたこと。昼飯も美味かったこと。力が出ました。
- ⑧突然の電話にもかかわらず朝日鉱泉の西澤さんに朝日川の様子を教えていただいたこと（後日電話でお礼を申しあげた）。
- ⑨平成25、26年の豪雨災害によりルートの一部崩落が見られたが、木川ダムに大量の土砂が堆積し、吊橋附近の渡渉が可能になったこと。
- ⑩参加者いずれも達者な方ばかりだったこと。（プロの人もおられた）

#### 7. 今後の課題、展望

このルートが歩ければ六十里越とつなが

ることになるのですが、それには朝日町内の林道以外の部分を整備する必要がある。

- ①茎ノ峯峠から萱野まで及び木川沢沿いの刈払。当時の道が残っている場所である。
- ②分岐箇所等のルート表示。
- ③朝日川渡り 水量により徒渉できない場合もあり不安定。一ツ沢迂回は遠い。
- ④継続して歩くことができれば、健脚者向けの昔日の参拝ルートの復活も。大井沢までは白鷹が案内、大井沢からは西川で案内して、白鷹発、1日目大井沢泊まり、2日目湯殿山参拝後鶴岡泊まり、3日目は観光で参拝ツアーも。

#### 参 考

出発に至るまでの経過

○平成26年6月8日

・茎の峰～萱野間調査

参加者 丸川二男 伊藤隆 加藤晃一

○平成26年9月13日

・萱野～木川間調査

参加者 丸川二男 伊藤隆

○平成27年7月2日

・萱野～木川間調査、刈り払い

参加者 丸川二男 伊藤隆  
高橋安治 井上日出男

○平成27年8月5日 打ち合わせ

出席者 丸川二男 伊藤隆 高橋安治  
梅津正明 丸川桂一郎

○平成27年8月19日 最終打ち合わせ

出席者 丸川二男 伊藤隆  
高橋安治 丸川桂一郎

○平成27年8月29日 出発

白鷹町の参加者の費用は、一人当たり反省会込みで約12,000円でした。

完

## ■紅餅作成時の廃液を活用した染物に関する史料紹介

石井紀子

#### 1. はじめに

本町では紅花を盛んにPRしているが、紅餅が使われた本紅の染物を手にする機会はほとんどなく、庶民には遠い存在である。

しかし、江戸時代には庶民層が手にした「花染め」という紅花の染物があった。紅餅を作る工程で出る廃液を活用した木綿の染物で、購入者の多くは出羽三山参りの行者（百姓）であった。本稿では紅餅の廃液を活用した二種類の染物の史料を紹介し、身近な染織品ともなった紅花の一面をみていきたい。



## 2. 史料紹介

### A. 花染め

花染めとは、紅花を発酵させて赤の色素（カルサミン）を増加させる花寝せという作業中に出る液体に、白い木綿を浸して染めたピンクから橙色の染物のことを表す。

史料① 河北町『大町念仏講中』享保18年（1733）

「湯殿山丑年参り 一 牛之年湯殿山之参詣毎度沙汰致よりハ存之外参詣有之、花そめ下地前々丑年より商内罷成候（略）」

今田信一著『べにばな閑話』（1980）では上記の花そめ下地のことを「粗末なべに花染めの木綿のこと」、「高山の冷気を防ぐために、この花染め木綿を腹に巻くことがおこなわれた。宿泊地の行者宿や土産物店などで、この布を買い求めてもちいたのである」と述べている。

『大町念仏講中』記述にある「前々丑年」とは宝暦6年（1709）を示し、この時には花染めの木綿が販売されていたことがわかる（ただし染色を河北町で行ったかは不明と、今田は述べている）。

史料② 『山形雑記』上巻〈山瀬遊圃編集、

明和4年（1767）～弘化2年（1845））

「一、湯殿山・鳥海山・月山 御領分ニ者無之三山共霊山也」

上記の項では、出羽三山参りの行者を泊めた旅籠屋の娘が以下のように花染めを行っている。

「客の寝たる頃を見合、国産之紅花仕入時故、紅花を寝せたる絞り汁を以、軒下へ盥を並へ、白木綿ヲ洗濯の如く、何も連声ニ而謡ひながら揉居る内ニ、自然紅染と成る」また、この項は「其花染木綿は諸国へ売出し、一つの国産也」と締めくくられており、一つの商品として花染めが成り立っていることが分かる。しかし、どこに売り出したのかは記述されていない。

### B. 黄色と推測される染物

黄色の色素（サフロールイエロー）を洗い流す、いわゆる花振りの際に出る液体に、白い木綿を浸した染物があった。

史料③ 大蔵永常『農稼業事』後編2巻 天保8年（1837）

「紅花を作る事」の項に染物の記載がある。字数の関係で要約文を以下に掲載した（原文は国立国会図書館デジタルコレクションにて閲覧可能

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2556737/6>）。

摘み取った紅花を袋に入れ、桶の中の清水でよくもみつぶし、黄汁を洗い流す「花振り」の工程で出た黄色の汁に、晒木綿を浸しては絞るという作業を繰り返すと「鬱金色」に染まる。この布が濡れているうちに、生梅を叩き潰すか、梅肉を削った物を水に浸してほどよくかき回した液体に布を浸せば「よき紅染め」となり、これを清水にて洗って干す。

上記の文章では、筆者が染物に明るくないためうまく解釈できない点が二つある。一つは、黄汁に含まれる黄色の色素（サフロールイエロー）は植物繊維に染まりにくいと聞いたことがあり、原文中にある「鬱金色」になるまで染まるのか疑問に思う。

もう一つは、原文中にある「よき紅染め」とはよい赤色に染まることを表現しているのか、それとも黄色に染まるが品質など他の点がよいことを表しているのか、わからない。この二点については実際に染めてみないとイメージをつかめず、今後の研究としたい。

### 3. さいごに

廃液を利用した染物は、紅餅の生産地では作りやすいものと考えられ、上杉藩内にて紅餅の出荷量が多く、道智道が通った白鷹町でも花染めが作られた可能性はあるのではないか。本町での花染めに関する歴史史料を得ることは難しいと思うが、一般に流布できる商品として花染めを考えれば、今後の地域活性化事業に十分活用可能な染色技法であろう。

## ■会誌『史談』28号「史談会60周年記念誌」の原稿を書いてください

前号でお知らせしましたが、会誌『史談』28号を「史談会60周年記念誌」として発行します。会員の皆さんは原稿を書いてください。

①研究発表（写真なども含め 16,000 字ぐらいまで）

②思い出すこと、これからのこと、会に期待すること、会員との思い出など自由に（400 字ぐらい）。原稿用紙を同封しました。

〆切を延ばしました 1 月 15 日（水）です。守谷もしくは江口タイプの江口儀雄さんまでお届けください。

メールでもかまいません。

moriya-eiichi@nifty.com

なお、記念事業は下記の通りです。

①日時 平成 29 年 2 月 18 日（土）

午後 1 時から

②会場 荒砥地区コミュニティセンター

③内容

記念式

記念シンポジウム

「鮎貝の歴史と文化（仮題）」

平吹利数氏 渋谷敏己氏など

祝賀会

## ■「60 過ぎたら文化に関わろう！」

こんなキャッチフレーズを考えて見たのは、このところ南魚沼の苧麻の糸績み（いとうみ）や結城の糸紡ぎ（いとつむぎ）などの話を聞いた。その時に、糸をつくるという仕事は生業として成り立たせることが難しい手間賃だなと思った。そして、それが無くなると無形文化財の越後上布も結城紬もなくなってしまうことに気付かされたことであった。

宮本常一の『忘れられた日本人』を読んでいたら西日本では一定年齢に達すると老人たちは隠居をするということが書いてあった。東日本ではこういう風習は少ないそうであるが、「隠居」というのもいいかもしれないとも思った。

隠居した老人は、自分の家に責任を負わなくなる。だから、世代交代がこれによって図られることとなる。また、村の世話役なども務めやすくなる。

年金受給年齢が引き上げられ、勤め人も 60 歳で仕事を辞めるということが難しくなった。定年を延長した事業所もある。そうでなくても定年後も何年かの再任用勤務を続ける人も少なくない。町内の役員会などでは、役員を務めてくれる人が不足するねということも呟かれている。

生活のために働かなければならないという世の中は、まだまだ貧しい社会なのではないかと思ってしまう。ある程度の年齢に達したらお金だけのためではなく、世間に意味のあることを考えて働くことができる社会の方が豊かなのではないかと考える。

それが、「60 過ぎたら文化に関わろう」ということだ。白鷹町の誇る 2 つの無形文化財を支える仕事でも「遊びながら」できる仕事もありそうに思う。会員の皆さん考えて見ませんか？

深山和紙関係で参加できそうな物を紹介しておきます

平成 29 年 1 月 15 日（日）

楮ふかしと楮はぎ 於 和紙センター  
（文責 守谷英一）